スポーツ歴史の検証
Sport History

アスリートと歩む人びと

第 16 回

メダリストを支える技術力

尾山　基

oyama　motoi

Copyright © 2013 SASAKAWA SPORTS FOUNDATION. All Rights Reserved.

アスリートと歩む人びと　第16回　尾山 基さん

その高い技術力で、数々のメダリストを支えてきた日本一のスポーツメーカーといえばアシックス。とりわけスポーツシューズの部門で、トップアスリートだけでなく市民ランナーなどの足元をサポートし続けてきた。

その前身は、“オニツカタイガー”のブランドで知られる鬼塚株式会社である。ローマオリンピック競技大会（1960年）のマラソンで“裸足の王者“と呼ばれたアベベ・ビキラ（エチオピア）選手に初めて靴を履かせたのが、伝説の創業者・鬼塚喜八郎氏だ。1949年に会社を興し、バスケットボールシューズの行商からスタートしたオニツカのシューズは、1964年の東京オリンピックでは実に47個のメダル獲得に貢献したという。

鬼塚氏の志を継いだ現社長は、5代目となる尾山基さん。鬼塚氏の娘婿でもある。その尾山社長に、近年のランニングブーム、アシックスの企業理念、スポーツ産業から見たスポーツ界などについてお話を伺った。

聞き手／西田善夫　文／山本尚子　構成・写真／フォート・キシモト

バスケットボールが取りもつ縁

――尾山さんは鬼塚喜八郎さんのお嬢さん（長女）の夫だそうですが、大阪市立大学商学部を卒業後、日商岩井（現・双日）に入社された尾山さんが、スポーツ産業とかかわりを持つようになった経緯を教えてください。

バスケットボールが取りもつ縁ですね。私は中学校でバスケットをやっていました。石川県立金沢泉丘高校時代は学校が遠かったこともあり、途中で辞めました。大学時代もほんの遊び程度。それが会社員になってまたふつふつとバスケットをやりたくなり、大阪勤務のときに会社のバスケットボール部に入部させてもらいました。2年間のドイツ研修中は、ケルンの地域スポーツクラブの2軍でプレーしました。1軍選手にはブンデスリーガに所属している人もいましてね。東京へ戻ってからはまた会社の部で活動しました。

――では趣味でバスケットを続けていらしたのですね。

中学時代はバスケットボール部に所属

そうです。私の嫁さんは甲南女子大学のバスケット部のOGでして、日商岩井大阪時代の上司の奥さんとOG仲間だったのです。それで紹介をされまして、神戸在住の彼女と東京勤務の私は今でいう遠距離恋愛でした。

東京オリンピック
聖火ランナーを務める

中学時代からのスポーツ体験が仕事で役立っている

――そうでしたか。アシックスといえばスポーツシューズですが、元はといえばバスケットシューズですよね。

中学時代、そういうことを全く知らずに、赤い線の入ったオニツカタイガーのバッシュ（バスケットシューズ）を履いていました。そのほかに陸上のハードルもやらされまして、バスケットの練習前に田舎道を3キロほどバッシュで走っていました。そんな毎日だったので、校内マラソン大会で3位になったこともあります。

――人生ってわからないものですね。バスケットと陸上、中学時代の経験が仕事に役立っているのですね。

はい、そうなるとは夢にも思いませんでした。

Copyright © 2013 SASAKAWA SPORTS FOUNDATION. All Rights Reserved.

アスリートと歩む人びと　第16回　尾山 基さん

日商岩井時代、バスケット部東西対抗戦

日商岩井からアシックスへ

オニツカ株式会社は、1977年7月に3社合併（株式会社ジィティオ及びジェレンク株式会社）して株式会社アシックスになりました。そのとき尾山さんは？

ケルンにいて新聞で知りました。当時はまだ結婚前で、東京に戻り結婚したのは1980年、30歳のときです。日商岩井にはその翌年までいました。そのころちょうど、ナイキジャパンの設立イシューに関する業務を担当していまして。当時はまだ、ブルーリボンスポーツ（BRS）社でした。

ナイキの前身BRS社は、もともとオニツカタイガーの靴を扱っていたのですよね。ナイキ側からアシックスへという流れは珍しい経歴ですね。

日商岩井時代

日商岩井をお辞めになるとき、鬼塚氏の後を継ぐということは……？

いや、そこまでは考えていませんでした。そもそも鬼塚さんは、結婚前に「婿さんを後継者にはしない」と言明していたそうですし。ただ私には、そろそろニューヨークかロンドン勤務という話が出ていて、行けば5年は戻れませんから今がタイミングかなと。日商岩井の上司からは、「おまえ、なんで靴屋に行くんだ」と言われましたけれども。

トップ商社からアシックス社へという、表現はよくありませんが“一介のスポーツ産業”へ飛び込まれてどう感じましたか。

その段階で、下働きで一からやっていこうと腹を決めていましたので、あまり何も思いませんでしたね。私の実家は親父が材木商をやっていて、商社には経営学を学ぶために入ったのです。いずれ会社を辞めて独立することを考えていましたし、財務についての知識も身についたので、アシックス社とご縁があったのだという気持ちでした。当時、鬼塚さんは「10年後は小売店がメーカーを制する時代になるだろう」と言っていました。その担当になるのかと思いましたが、本体勤務でした。

ASICS本社海外事業部

商品の金額にギャップはあったでしょう。

それはもう。為替のディーリングや造船の何百億円というプロジェクトから、6,000円や7,000円という単位になったので、はじめはなかなかピンと来ませんでした。

マラソン野口みずき選手の走りに感動

お仕事柄、オリンピックとの関わりは深いものがありますね。

親父（鬼塚氏）は、バスケットボール大会は必ず行っていましたね。私は1992年のバルセロナ大会が初めてで、鬼

Copyright © 2013 SASAKAWA SPORTS FOUNDATION. All Rights Reserved.

塚さんの温情もあったかもしれませんが、ついていってフルに滞在しました。あの大会はサマランチさんとの関係もあり、大会関係者の靴はすべてアシックスが支給したのです。鬼塚さんは「もうこんなことはない」と言っていましたが、そのとおりでそのあとはもう無理ですね。

――オリンピックで感動のシーンというと何が浮かびますか。

ヨーロッパに赴任していて、現地で迎えたアテネ大会（2004年）での女子マラソンの野口みずきさんですね。ものすごく暑くて、私は短パン姿でした。一時、独走状態となった野口さんでしたが、スタジアムに走り込んできたときはヌデレバ（ケニア）が追い上げてきていて、12秒差でのゴール。もう感動して、声が出なかったですよ。

――あのときの野口さんのコメントは、「本当に幸せです」でしたね。

はい。レース直後、すぐに救急車が入ってきて、30～40分、出てこなかったと記憶しています。あの方は100の力があるとしたら、多分レースでは110の力を出しているのですよ。そのプラス10の力が私たちの琴線に触れるのでしょう。

アテネオリンピック女子マラソンで日本人2連覇を達成した野口みずき

――昨夏のロンドンオリンピック後のメダリストの銀座のパレードも感動しましたよ。

あれはすごかった。そして、あれは民間ガードマンを使っていました。いろいろな方がフレキシブルに動いた結果、成立した素晴らしいイベントでしたね。

日本体育協会とともに国民皆健康のために歩んできた

――尾山さんは2008年に社長に就任されました。“アシックス”の名のもと、バスケットボールのシューズ、陸上のシューズというようにどんどん多角化といいますか総合化というのでしょうか、どのような戦略で進められてきたのでしょうか。

鬼塚さんのスポーツ用品メーカーとしてのポリシーは、戦後の日本体育協会と歩調を合わせて、「国民皆（かい）健康のために全てをそろえましょう」ということでした。例えばフェンシングシューズのように競技人口の少ない競技でも、採算を度外視してでもきっちりとした製品をつくりました。

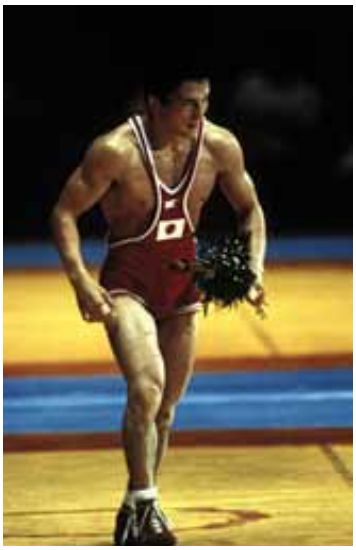
――海外の競合スポーツメーカーはどういう動きをしているのですか。

はい、“失われた20年”と呼ばれる1990年代、当社も赤字が続きました。そのころ、ナイキなどではたしか6ジャンル程度に集中させています。アディダス社はヨーロッパと

モスクワ世界陸上　新谷選手記者会見

Copyright © 2013 SASAKAWA SPORTS FOUNDATION. All Rights Reserved.

いうこともあり、レスリング用もフェンシング用も生産していましたが、アシックスヨーロッパはいわゆるクリーツ式（歯を交換するタイプのスパイク）のものは一時、全部止めました。サッカーやラグビー用ですね。それでランニング用のシューズに力を傾注していったわけです。今はまたテニスやラグビーを伸ばそうとしています。



ロサンゼルスオリンピック
レスリングフリー57kg級
金メダルの富山英明

――アシックスさんには体協と歩んだ歴史もありますし、難しいところですね。

当社の場合は、もっと絞ってよいのではないかという考え方もあります。しかし今までの流れがありますので、ある種目から撤退すると言ってよいのかどうか。アディダス社が最大限対応している以上、採算は別にして残しておかなければならないでしょう。そこで、ナンバー1になれるブランドカテゴリーを再度、構築すべきだと考えています。

――シューズ部門の見通しはいかがですか。

2015年までに4,000億円という4年計画がありましたが、このままでは少し厳しいかもしれません。まあまあ堅調ではありますが、満足はしていないといったところです。

ドーピングは重大な裏切り行為

――世界陸上のモスクワ大会がありましたが、残念ながら大会前にドーピング問題が発生し、タイソン・ゲイ（米国）、アサファ・パウエル（ジャマイカ）等、陽性反応が出たとされる有力選手が欠場となりました。靴とは直接関係はありませんが、「陸上」という業界で大きなウエイトを占めていらっしゃる御社としての率直な感想をお願いします。

一番目には、たいへん意外でした。IOC（国際オリンピック委員会）が毅然とした態度を打ちだし、本人は当然としてコーチやドクターも厳重に注意をしているはずなのに、なぜトップクラスの選手が、という疑問です。知識や情報のない時代は、ドーピングの意図などなく「葛根湯でアウト」というケースもありましたが、あのころと比べればアンチドーピングへの意識が高まっているはずなのに非常に残念です。

――そうそう、ありましたね。

ヨーロッパでは、自転車レースで薬物使用による追放処分も出ています。うちも「ジロ・デ・イタリア」というレースをサポートしていた時期があったのですが、薬物問題が出てきたので退きました。ブランドイメージが悪くなりますからね。まあ“アマチュアリズム”という言葉がなくなって以降、世界のトップクラスでは巨額な金銭が動く競技もあるため、巧妙になっている可能性もあります。しかし本来、スポーツは人間の力を競うべきものなので、薬物を使用しているとすればそれは重大な裏切り行為ですね。

――ドーピングの意図があったのか、選手が知っていたのかどうか、ですね。

タイソン・ゲイ

アサファ・パウエル

Copyright © 2013 SASAKAWA SPORTS FOUNDATION. All Rights Reserved.

プロ野球の井口資仁選手（現ロッテ）がメジャーリーグに在籍していたとき、イチローさんを含めて年に一度、あいさつに来られていました。驚いたことに、井口さん曰く、「カゼをひいたときも球団指定の薬しか飲まない。それ以外は何が入っているかわからないから」という話をされていました。

世界一の市民マラソン大会に成長した東京マラソン

――最近は空前のマラソンブームですね。これは予想どおりですか。

まあ順調といえます。日本でもマラソン人口が2桁伸びています。日本におけるマラソン文化に変化が現れています。以前は、健康のために一人で黙々と走る。5キロほど走るとランニングハイになってきて、苦行僧のように走るのが一般的でした。それが今では、「私も走っているのよ」「私も」といったように、マラソン文化が横に広がっていった感じがしますね。

――横に広がる、そうですね。

その象徴が東京マラソンです。あの大会の特徴は、時間制限を7時間にしたところです。あれは石原慎太郎前知事の英断でした。7時間というのは、都庁前からお台場まで早歩きで到達できる時間なのです。あれがトリガーとなって、門戸を大きく広げましたね。健康のためだけではなく、軽くジョグするのもファッショナブルで、FUN（楽しい）だよと。これが香港や台湾やシンガポールといった東南アジアの国々にも伝播していっています。ランニングが文化として成熟する一つのプロセスにあるととらえています。

第1回東京マラソンのスタート風景

――マラソン観が変化してきているのですね。

もう一つ特筆すべきことは、東京マラソンは地方の陸上協会の方ではなく、1万人以上のボランティアで運営されているのです。たしかお弁当代も何も出ないはずなのですが、募集するとたった1日で満杯になるそうです。役割ごとのボランティア講習会も定められています。はじめはニューヨークシティマラソンのコピーを意図していたのに、いつの間にかその上をいっている感じがしますね。

――もう完全な「スポーツ文化」ですね。

私たちは東京マラソンを最初からサポートしていますが、このようなムーブメントが起こるだろうと予想はしていました。計時チップを装着し、メディアで全部記録されているので、IDナンバーを入力すると、ランナーの映像を検索することができるのですよ。

――すごいですね。そしてバックアップしている科学の進歩もすごいものがありますね。

ランナーの方自身が、水やサプリメントの摂取、終わったあとのストレッチなど、こちらが提供する情報をとても真面目に受け止めてくれます。それと感心するのは、医療体制の素晴らしさです。AED（自動体外式除細動器）やドクターが満遍なくコースに配置されていますし、しっかりオーガナイズされています。世界で一番安全で自然なかたちで運営されているマラソンといって過言ではないでしょう。

――素晴らしいですね。東京マラソンは順位や勝った負けたではなく、参加できたこと、ゴールインしたこと自体が誇りになりますね。成功しましたね。

しましたね。

Copyright © 2013 SASAKAWA SPORTS FOUNDATION. All Rights Reserved.

アスリートと歩む人びと　第16回　尾山 基さん

スポーツを通じた人間教育

――尾山さんはご自身が実際にスポーツマンだったわけですが、スポーツを通じての人間教育のポイントはどこにあると思いますか。

私は中学のとき、陸上を2年半ほどやりました。陸上は一人でやるスポーツです。ハードルの選手なんて、一人でメジャーで距離を測りながら、ハードルを丁寧に並べて、練習後、またそれを一人でしまわなければなりません。一人でのトレーニングでは我慢強さと克己心が培われます。自分の体験からそう思います。

――バスケットはどうですか。

チームプレーのスポーツには、ポジションというものがあります。お互いの適性にもとづいて決めていく。私はもともとシューターだったのが、最後はガードにまわりました。その年代ごとにチームメイトとの兼ね合いで、より適性のあるやつに場所を明け渡し、自分が働ける場所を探す。そうすることでチームワークを身につけると同時に、自分の可能性を広げていくことにもなりますね。

尾山基氏

企業として スポーツを愛する人に いかに貢献するか

――アシックスさんの企業理念や、スポーツを通じての社会貢献についてはいかがでしょうか。

まず当社の創業哲学は、「スポーツをする人、スポーツを愛する人に貢献すること」です。そして、スポーツを通じて健全な青少年の育成をしたい。そのための企業スローガンは、「sound mind sound body」です。「健全な身体に健全な精神があれかし」というあの有名な言葉からとったものです。

北京オリンピック　ロザ・モタさん（左）と

――御社の「企業の社会的責任（Corporate Social Responsibility＝CSR）」の中にも、そのような文言が見られますね。

はい、CSRで「スポーツ用品メーカーとして、スポーツを通じて質の高いライフスタイルを提供し、世界の人々の健康と幸せを追求する」とうたっています。具体的にいえば、何よりも「安全な商品をつくっていく」ということです。そしてつくる環境の管理ももちろんしっかりとやる。有害物質が混入せずに安全に使える製品というのは、メーカーサプライヤーとしては必須のものですから。さらに東京マラソンや神戸マラソンをスポンサーリングすることで、私たちもボランティアで動いていますので、そのようなかたちで社会貢献をしていきたい。また別のアプローチになりますが、本社のある神戸市に市と連携して安全なランニングコースをつくろうという働きかけをしています。工事を2期に分け、トータルで12キロほどのコースを考えています。我々はウッドチップの分を請け負い、あとは時間をかけてメーター表示などを施して整備を進める予定です。

北京オリンピック・アシックスサービスセンターにて

Copyright © 2013 SASAKAWA SPORTS FOUNDATION. All Rights Reserved.

数々の名言のひとつ「ブランドが特化することの弊害」

――尾山さんの書かれたものを拝見しますと、数多くの名言があります。短い文章なのに、言い得て妙といった表現が並びます。「強みと弱みを知ることの大切さ」。これはなるほどと思います。強みをさらに強化すれば、弱みを蹴散らすこともできるでしょうしね。「ブランドが特化することの弊害」という言葉がありました。これは少し説明をいただけますか。

モントリオールオリンピック陸上競技で
5000m,10000mを制したラッセ・ビレン

例えば「小型車」で確固たるブランドイメージを構築している自動車メーカーが大型の高級車を出したときに、果たして信頼されるのかということです。アシックスアメリカではランニングに絞った結果、売上の90%をランニングが占めるようになりました。「アシックス」といえば「ランニング」というように浸透しているのです。そうなったときに、バスケットボールやゴルフで実績を上げていこうとすると難しいのです。ではバスケットは違うブランドでいこうとすると経費が分散してしまいますし、移行しても受け入れられるブランドでなくてはいけないというリスクを負うのです。このように、一つのことに特化することは、多角化の障害になる可能性があるわけです。

――なるほど、その意味がよくわかりました。

業界団体の充実・発展も大事な課題

――ところで、尾山さんは日本スポーツ産業学会の会長に就任されたそうですね。

7月に就任したばかりのほやほやです。かつて鬼塚さんが会長を務めていたこともあり、亡くなって以降、「入ってくれ」とずっと言われていた経緯があります。

――それから、世界スポーツ用品工業連盟会長も務められていますね。

はい、鬼塚さんは対外活動を念頭に置いたときに、一社だけでなく「スポーツ産業」という業界全体の発展も合わせて視野に入れていく必要があると常々主張していま

北京オリンピック・アシックスサービスセンターの前で

Copyright © 2013 SASAKAWA SPORTS FOUNDATION. All Rights Reserved.

した。そこで、関西スポーツ用品工業会、さらには日本スポーツ用品工業団体連合会の設立に尽力されました。同団体は、通商産業省（当時）所管のもとで社団法人化し、強力な業界団体の一つとして、行政への発言権も持つようになっていったのです。1983年に鬼塚さんが会長を務めたこの団体で、いま私は副会長をしています。

――スポーツ用品工業の国際団体もあるのですよね。

はい。同時期に、ヨーロッパでは世界スポーツ用品工業連盟が結成され、鬼塚さんは第3代の会長に選任されました。今は私が、2011年2月から3年間の任期で第13代会長職に就いています。

「民間」の力をもっと活用してスポーツをプロモーションする

――では、企業として次に目指しているものは何でしょうか。

戦後、体育協会と教育委員会が日本のスポーツを先導してきました。スポーツは主に体育として、学校における教育プログラムの中に組み込まれていました。スポーツ振興にはそのほか、ドイツなど欧米で発達した総合型地域スポーツクラブのような「クラブ型」、東京マラソンなどの「イベント型」もあります。私は欧米型のほうがいいと思っています。

――つまり、教育委員会からは離れると……？

子どものスポーツ

子どものスポーツ

はい。東京マラソンは知事直轄型にしたという意味で、新しいモデルを示しているといえます。私はドイツで暮らしたことがありますが、ドイツは地域型スポーツクラブが充実しています。行政の資金のサポートが入ってもよいのですが、日本もこの路線を目指していくべきではないでしょうか。

――私は東京都北区の体育協会の会長をしています。スポーツへの組織としての関わり方を考えたときに、予算の問題はあるもののできるだけ競技団体に任せようじゃないかと。規模の大きさは別として、その視点はそんなに間違っていないですよね。

そう思います。日本はまだ「官」の動きが強いですからね。欧米は、「官」の力もありながら、「民」の力はさらに強いのです。ですからスポーツ業界として、フィジカル・アクティビティをもっとプロモーションしていきたいと思っています。

スポーツ庁を設置し省庁横断の部分を改める

――スポーツ庁が設置されたら、スポーツ振興はどのように変化すると思われますか。

市民参加型の機運を、学校の先生方で構成される教育委員会がリードするということには矛盾を感じています。マラソンで有名なロザ・モタ（ポルトガル）やラッセ・ビレン（フィンランド）は、ともにスポーツ庁の大臣になったことがあると記憶しています。日本でも早くスポーツ庁をつくり、省庁横断になってしまっている部分を改めて、学校教育プログラム以外の部分を充実させていくべきではないでしょうか。どの国にもNOC（ナショナルオリンピック委員

Copyright © 2013 SASAKAWA SPORTS FOUNDATION. All Rights Reserved.

尾山基氏

会）がありますので、すべてがIOC（国際オリンピック委員会）の傘下になるのかは別として、棲み分けの問題がありますね。

アスリートのセカンドキャリアについては、どのような取り組みをされていますか。

非常に大きな課題だと思っています。JOC（日本オリンピック委員会）では、「アスナビ」というトップアスリートの就職支援ナビゲーションを始めています。競技者としてだけではなく、人間性の高い社会人を育てるという意味でも有用なプログラムです。以前は、有名なアスリートで切符の買い方も知らない人がいる、なんて笑えない話もありましたからね。当社も、そのプロジェクトでアスリートを企業人として受け入れていきたいと考えています。今は陸上の小島茂之、木村慎太郎などが在籍しています。これを一企業だけではなく組織立ってどうしていくかをもっと進めていくべきでしょう。経団連（日本経済団体連合会）や経済同友会との連携を深めていくのがいいと思います。

鬼塚喜八郎氏の中小企業家経営訓「企業は公器である」

鬼塚喜八郎さんは、いろいろな経営哲学を持っていらした方でした。たくさんある中で、尾山さんが一番、肝に銘じていることがあれば教えてください。

電通には「鬼十則」という社則があるそうです。それにならったわけではないでしょうが、鬼塚さんは「中小企業家・経営十訓」というのをつくり、常に自分への戒めとしていました。その第1条にあるのが、「企業は公器である」です。そのあとに、「企業を私物化し、公私混同してはならない。ワンマン経営は自滅の始まり」と続いています。会社を「公器」ととらえるのは、松下幸之助さんの影響でしょう。

使命感を持ち、私物にはしないということですね。

そうですね。それから第5条では、「経理の秘密主義をやめ、ガラス張りのオープン経営をせよ」と言っています。今の時代こそ、それが求められているでしょう。初期には、「正直者がばかを見ないように」と言っています。「努力をすれば必ず報われる。他人を幸せにすれば自分も幸せになれる。正直者がバカをみない企業風土を作り上げれば人は活きる」という信念が経営の根幹にあったようです。

アテネオリンピック時、鬼塚社長と共にサマランチIOC会長を表敬訪問

2020年夏季オリンピック招致のポイントは“安全性”

2020年夏季オリンピックの招致レースの見通しはどうでしょうか。

私は東京が有利ではあるかなと見ています。実は私、1964年の東京オリンピックのとき、聖火ランナーの随走者に選ばれたのです。石川県内の3キロほどを走りました。今でもメダルを持っていますが、おそらくスポーツ用品業界の中で、私以外だれもいないんじゃないかな。

Copyright © 2013 SASAKAWA SPORTS FOUNDATION. All Rights Reserved.

――そうでしたか。

燃える聖火の白い煙のにおいをかぎながら、その後ろで旗を持って走りました。それが50年経って、また東京オリンピックに関わることになるとは思いもよりませんでした。

――尾山さんが東京有利と見る根拠は？

何より安全だということです。IOC（国際オリンピック委員会）としては、紛争のリスクは避けたいというのが一番にあるのではないでしょうか。テロ対策は島国ということで遮断されていますし、治安がいい。そしてホテルインフラができている。東京都はすでに4,000億円の準備金を用意していますし、激高することのない国民性で管理しやすいというのもあります。

尾山基氏

懸念材料は ロビー活動をする人員の不在

――ロビー活動というのは、昔から日本人が苦手としているところですね。

北京オリンピック・サマランチ前IOC会長（右）と

ロンドンオリンピックでロゲさんにお会いしたときもそうだったのですが、結局、日本にはロビー活動をする人材がいないのですよ。IOC（国際オリンピック委員会）委員というのはいわばサロンのメンバーですから、そこでロビー活動ができていないのはちょっとつらいと思いますね。私は以前、米国に駐在していたときに、鬼塚さんの指示で、ロサンゼルスに住むフレッド・イサム・ワダ（日本名：和田勇）さんのご自宅に伺ったことがあります。勲三等を取られたのでウイスキーをお届けに行きました。

――この方がいらっしゃらなければ、1964年の東京オリンピックの招致はあり得なかったといわれる日系2世の実業家、あのフレッド・ワダさんですね。私、1976年のモントリオールオリンピックのとき、散歩をしていらっしゃるワダさんにお会いしたことがあります。ご挨拶したら喜んでくださって「一緒にお茶を飲もう」と。

戦後すぐのころ、水泳チームはじめ日本から遠征してくる選手団の面倒をよく見ていらしたワダさん。1964年の招致活動では、メキシコなど中南米地域を家業を休んでまで全部、自費で歴訪し、支持を取り付けてくださったのですよね。

フレッド・ワダ氏

――今はそういう方がいらっしゃらない…。

Copyright © 2013 SASAKAWA SPORTS FOUNDATION. All Rights Reserved.

逆に言えば、商社や銀行、メーカーといった国際的にネットワークを持つ企業がたくさんあるわけですから、そこにオフィシャルに頼んで、もっと民間を巻き込んで官民一体となってなぜやらないのかと疑問に思っています。

2020年東京オリンピックがスポーツ振興へ与える影響とは

――もし2020年に東京オリンピックが招致できたとすると、それはスポーツ振興へどのような影響があると思いますか。

子どものスポーツ

北海道から沖縄まで感動と興奮の輪に包まれることによって、子どもたちを含め、「スポーツはいいな」という再確認がなされるでしょう。社会的インフラとしては、国民体育大会が各都道府県の2巡目に入っているので、国立競技場は別にして競技場は大体そろっています。インドア用の建物の整備も始まっていくでしょう。ただ学校のグラウンドを市民にオープンにしようという動きが、止まってしまい、体を動かせる場所が限られてしまっています。その問題を含めたインフラ整備と、機運の盛り上がりと、選手のみならず指導者の育成、この3つがそろえばもっとスポーツの盛んな国になっていける、その意味で大きな影響がありますね。

スーパースターが継続的に出現できるように

――いろいろとお話を伺ってきましたが、次世代のスポーツマン＆スポーツウーマンを生み出すために何が必要でしょう。

最近の若手注目アスリートといえば、陸上の桐生祥秀選手です。100メートルで10秒01の記録を出した17歳の高校3年生。彼のようなスター選手が継続的に出現してくることが、スポーツ界に必要だと思います。私の時代でいえば、バスケットの諸山文彦選手でした。白黒テレビを通して、あのシュートはきれいだなとか、ゴール下に入る動きなどを見て感動していました。

シドニーオリンピック女子マラソンで金メダルを獲得した高橋尚子

――ああ、なつかしいですな。

それから、スポーツ大会のシステムです。現状では、中体連（日本中学校体育連盟）、高体連（全国高等学校体育連盟）の大会には、学校体育の範ちゅうの選手しか参加できません。学校の部活動のチームですね。スポーツ振興は基本的に地域スポーツクラブ主導でいくべきだという観点に基づいて申し上げると、それを地域クラブのチームでも出場できるようにしたほうがいいと思うのです。

――少子化もあってチームが組めない学校も増えていますからね。

MLBで大活躍のイチロー選手

Copyright © 2013 SASAKAWA SPORTS FOUNDATION. All Rights Reserved.

アスリートと歩む人びと　第16回　尾山 基さん

体を動かすことは脳の活性化につながる

あと気になるのが“ネット時間”とのバッティングですね。データによると、10代の青少年は6時間以上もネットに向かっているそうで、2年前に比べても急増しています。

――うーん、その分、失われている時間があるはずですね。

それは何かと言うと、フィジカル・アクティビティー。すなわち簡単な散歩を含めた運動ですよ。欧米でも同様の傾向が見られるので、「もっと体を動かそう運動」というのをやっています。要は、いかに時間をつくるかが課題になるので、啓蒙のためのシンポジウムかセミナーを開催するつもりです。

――フィジカル・アクティビティーで得られる効果はどんなことでしょう。

5歳児前後のときに「運動するんだよ」ということを脳と体に刷り込んでおくと、その人たちが20歳や30歳になっても運動を習慣化できているというデータがあります。端的に言えば、体を動かすことは脳を活性化する働きがありますから、充実した生活につながるわけです。だからせめて小学校低学年のうちに、運動習慣の刷り込みをしておきたいですね。あとは学校の体育の時間を、強制ではなく何か好きなものをやらせてみるのも有効ではないかと。

子どものスポーツ

スポーツはユニバーサルなランゲージ

――スポーツで体を動かす習慣づけ、多方面からアプローチしていきたいテーマですね。

ロンドンオリンピック開会式

はい。アシックスが誕生したとき、「アシックス、スポーツ・イズ・ザ・ユニバーサルランゲージ」というコピーを使っていました。近年、海外に行くと本当に「スポーツはユニバーサルランゲージだ」と感じます。スポーツを話題にすると、知らない人ともコミュニケートできる。試合を一緒に観戦してともに感動できる。お気に入りのアスリートについて語っていると、そこはもう政治も経済も超越した空間になれるのですから。

――ああ、本当にそうですね。お義父さまのことはよく存じ上げていましたし、感銘を受けたことも多くありました。きょう、こうして尾山さんとお話しできて楽しい時間となりました。どうもありがとうございました。

Copyright © 2013 SASAKAWA SPORTS FOUNDATION. All Rights Reserved.

・・・・尾山基氏 略歴　・・・・世相

アシックスの歴史

1949 昭和24
鬼塚商会を改組し、鬼塚株式会社（神戸市）を設立

1950 昭和25
鬼塚株式会社、「バスケットボールシューズ」第1号販売

1950 朝鮮戦争が勃発

1951 安全保障条約を締結

1951 尾山基氏、石川県に生まれる

1952 昭和27
鬼塚株式会社、「バレーボールシューズ」第1号販売

1955 日本の高度経済成長の開始

1958 昭和33
鬼塚株式会社、「テニスシューズ」第1号販売

1962 昭和37
鬼塚株式会社、「サッカーシューズ」第1号販売

1963 昭和38
商号をオニツカ株式会社に変更

1964 東海道新幹線が開業

1973 オイルショックが始まる

1969 アポロ11号が人類初の月面有人着陸

1974 尾山基氏、日商岩井（現双日）に入社

1976 ロッキード事件が表面化

1977 昭和52
商号を株式会社アシックスに変更

企業スローガンを「スポーツは世界のことば」とする

1978 日中平和友好条約を調印

1979 昭和54
テニス、ゴルフのトータル展開をスタートさせる

1980 昭和55
明治製菓と販売契約を行い、スポーツサプリメント「サバス」を発売

1982 尾山基氏、アシックス入社

1982 東北、上越新幹線が開業

1984 香港が中国に返還される

1985 昭和60
科学的基礎研究体制強化のため、スポーツ工学研究所を設置

1990 平成2
研究開発・人材育成の新たな拠点として、アシックススポーツ工学研究所・人財開発センター（アシックスR&Dセンター）設立

1992 平成4
鬼塚喜八郎が会長に就任

バルセロナオリンピックで、大会関係者の全ての靴を提供

1995 阪神・淡路大震災が発生

1997 平成9
アシックス誕生20周年

1999 平成11
鬼塚株式会社創業50周年

「オニツカタイガー」復刻版シューズ発売

2002 平成14
「オニツカタイガー」ブランドのシューズの本格展開を開始

2006 尾山基氏、アシックスヨーロッパ B.V. 代表取締役社長

2008 平成20
新企業スローガン「sound mind, sound body」を定める

2008 尾山基氏、アシックス社長に就任

2008 リーマンショックが起こる

2009 平成21
企業博物館であるアシックススポーツミュージアムを開館

2011 尾山基氏、世界スポーツ用品工業連盟（WFSGI）の会長に就任

2013 平成25
アシックスジャパン株式会社を新設
世界本社機能と日本事業を分離

2013 尾山基氏、日本スポーツ産業学会会長に就任

尾山 基（おやま・もとい）

1951年石川県生まれ。大阪市立大学商学部卒業後、日商岩井（現双日）を経て、82年アシックス入社。マーケティング統括部長、アシックスヨーロッパ B.V.代表取締役社長などを歴任し、2008年より代表取締役社長CEO。11年より世界スポーツ用品工業連盟（WFGSI）会長。

西田 善夫（にしだ・よしお）

1936年生まれ。スポーツ評論家、元NHKエグゼクティブアナウンサー、解説委員。64年の東京大会以来オリンピック10大会で実況、5大会で解説・キャスターを務める。98年から02年まで横浜国際総合競技場初代場長。著書に『オリンピックと放送』（丸善）ほか。

山本 尚子（やまもと・なおこ）

東京都生まれ。スポーツライター、NPO法人日本オリンピック・アカデミー理事。スポーツビジネス・シンクタンク勤務を経てフリーとなり、スポーツを中心に執筆活動を行う。『パラリンピックがくれた贈り物』など著書・共著多数。

フォート・キシモト（写真提供）

半世紀にわたり、オリンピック、FIFAワールドカップ、世界陸上などの世界のビッグイベントから市民スポーツに至るまで、幅広くスポーツの写真取材活動を継続して行っている世界的なフォト・エージェント。

企画制作　公益財団法人 笹川スポーツ財団
後　　援　文部科学省、東京都、公益財団法人 日本体育協会、公益財団法人 日本オリンピック委員会、
特定非営利活動法人 日本オリンピアンズ協会、東京2020オリンピック・パラリンピック招致委員会
メディア協力　（株）共同通信社、サンケイスポーツ
特別協力　（株）アシックス、（株）伊藤園